

第三回

教育相談の「心」(二)
アドラー心理学による児童生徒理解

会沢 信彦

文教大学教育学部准教授

教育相談や生徒指導にとって「アルファでありオメガである」などと言われるほど重要なのが児童生徒理解である。まさに、まずは「分かるうとする」こと、「相手の目で見、相手の心で聞き、相手の心で考える」ことが求められるのである。

児童生徒理解に関しては、特に教育相談においては従来からさまざまな考え方が提唱されている。そのうち、学校教育に活かせる理論として近年関心が高まっているのが、アドラー心理学である。

一 アドラー心理学とは

アドラー心理学（「個人心理学」とも呼ばれる）とは、オーストリアの医師、アルフレッド・アドラー（Alfred Adler:1870～1937）によって創始された、心理学の一大理論・実践体系である。

アドラーは、当初は精神分析の創始者で

あるジグムント・フロイトの仲間として、精神分析の研究に携わっていた。しかし、次第に考え方の相違が表面化し、フロイトと袂を分かつこととなった。そして、「個心理学」として自身の理論を体系化していくこととなる。

アドラーは、しばしば並び称せられるフロイトやユングと異なり、臨床のみならず教育にも多大な関心を持っていた。そして、ウィーンで数多くの教育相談所を設立するなど、言ってみれば「教育相談の父」とも言うべき存在である。

今週と次号の二回にわたって、アドラー心理学の立場から見た児童生徒理解のあり方について考えたい。

二 目的論

アドラー心理学を特徴づけるもつとも重要な考え方は「目的論」である。

私たちはしばしば、他者のある行動を理解しようとする場合、「なぜ彼・彼女はそのような行動を取ったのか」と考える。つまり、行動には必ず原因があり、原因を知ることによって彼・彼女の行動を理解できると考えるのである。

しかし、アドラー心理学では、「人間の行動には目的が存在する」と考える。人間の行動は、過去の原因によってではなく、その目的によって規定されるのであり、他者の行動を理解するためには、その目的を知ることが重要だと考えるのである。ただし、その目的は無意識的、つまり自分でも気づいていないことが多い。

アドラーは、次のように述べている。

人間の精神生活を研究するうえで、もつとも重要な問いは、「どこから？」ではなく、「どこに向かつて？」である。

ところで、アドラー心理学では、子どもの不適切な行動の目的は四つあると考えている。詳しくは次号で述べることにしたい。

三 現象学

科学的な思考になじんだ私たちは、我々が暮らしているのは客観的な世界であると

考えている。そればかりか、暗黙のうちに、他者も自分と同じように感じ、考えるものだと思ひ、自分とまったく違う感じ方や考え方をする人に出会うと驚くことも多い。

しかし、アドラー心理学では、「人は自分なりの主観的なものの見方で世界を認識するものである」と考える。人は客観的な現実に反応しているというよりも、必ず自分なりの色眼鏡で世の中を見ているのだ、と考えるのである。

教育相談に携わってきた教師であれば、この考え方は初めて耳にするものではないはずである。つまり、この考え方はアドラー心理学の専売特許と言うよりも、むしろ教育相談全体を貫く人間観であると言えるだろう。

ところで、アドラー心理学では、個人に特有のものの見方の背景にあるものとして、「ライフスタイル」を想定した。ライフスタイルとは、自己と世界の現状と理想についての信念の体系であると言われている。

四 対人関係論

精神分析では、人間のパーソナリティーや行動を、精神内界の力動から説明しよう

とする。つまり、意識と無意識、あるいはエス（イド）と自我と超自我における葛藤が、行動の源になると考える。

それに対してアドラー心理学が重視するのは対人関係である。アドラー心理学では、「人間の行動はすべて対人関係行動であり、特定の相手役が存在する」と考える。つまり、我々の行動は、基本的には必ず誰かに向けてのメッセージが込められている、と考えるのである。

したがってアドラー心理学では、ある子どもが、学校と家とで、あるいは学校の中でも教師によって行動や態度を変えるのは当然であると考ええる。また、発達障害がある子どもであっても、担任が替わると問題行動が少なくなったり逆により目立つたりするという現象も、対人関係論の立場からすればごく自然なことなのである。

五 三つのライフタスク

アドラー心理学では、私たちには人生で取り組まなければならない三つのタスク（課題）が存在するとしている。

まず、仕事のタスクである。私たちが満
足すべき人生を送るためには、人生の中で

何らかの生産的な活動に携わらなければならない。学校生活を送る児童生徒の場合は、学業が仕事のタスクになる。

次に、交友のタスクである。いくら満足すべき仕事をしていても、友人がいなければ、私たちの人生は寂しいものとなる。子どもの場合は、まさに他の子どもとの交友関係がこのタスクに当たると言えよう。

そして、最後が愛のタスクである。これは成人の場合であれば異性との愛情関係であるが、子どもであれば親との関係がこれに相当する。ちなみにアドラーは、三つのタスクの中で愛のタスクがもっとも達成するのが困難な課題であると述べている。

この三つのタスクが達成されているかどうか、大人にとっても子どもにとっても精神的健康のバロメーターになるのである。

〈参考文献〉

野田俊作（監修）、現代アドラー心理学研究会（編）『アドラー心理学教科書』ヒューマン・ギルド出版部（TEL 03-3235-6741）